

第17回日本統合失調症学会 大会報告（大会事務局から）

国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 地域精神保健・法制度研究部
山口創生、川口敬之、塩澤拓亮

2023年3月25,26日に第17回日本統合失調症学会が開催され、無事終了することができました。第17回大会は、前年度に開催された第16回大会が掲げた「当事者・家族との協働」や「対話」という意志を受け継いだ大会でした。第17回大会は、前回大会の「協働」と「対話」をさらに進めることを目指し、「対話の扉の先へ」という主題を掲げ、多様な立場の方が足元にある課題を見つめながら、研究が照らす未来を一緒にみていくことを副題として設けました（図1）。本報告では、第17回大会の概要や経緯、「社会実験」として試みた工夫などを紹介したいと思います。



図1 第17回大会のフライヤー

1. 大会の構想とプログラム委員会

第17回大会の準備は、2022年4月に発足した当事者、家族、支援者、研究者などで構成されるプログラム委員会から始まりました。4回のプログラム委員会を通して、8つの主要シンポジウムのテーマを決定し（Box.1）、すべてのシンポジウムにおいて当事者あるいは家族が登壇することも決めました。また、プログラム委員会では当事者・家族が参加しやすい工夫も議論され、①事前資料の用意、②難しい言葉リストの作成、③見逃し配信、④グループ参加（当事者団体や医局などにおいて集団でオンライン視聴する形態）、⑤登壇者同士の敬称は「先生」ではなく「さん」に統一すること、⑥シンポジウムの発表内容には「わかっていないこと」も含めることなどの工夫を試みることにしました。なお、プログラム委員に当事者・家族を含めることや登壇者同士の呼び方、明らかになっていないことも報告するルールなどは、第16回大会の試みを継承した工夫でもありました。

Box.1 主要シンポジウムの8テーマ

1. 研究テーマ再考
2. 診療ガイドラインからみた薬物治療最前線
3. 当事者と専門職とのコミュニケーション
4. 脳研究最前線
5. 学校の精神保健教育：一市民として、学校教育で教わるべきことは？
6. 地域における統合失調症の理想と現実
7. 主体性の再考
8. 家族支援の現在地

2. 大会の準備と広報

第17回大会の事務局は、プログラム委員会で決まった内容を実装するために、2つの取り組みを行いました。第1に、各シンポジウムのミーティングを9月から順次開始し、初回のミーティングでは、事務局メンバーが登壇者に大会の趣旨や狙いなどを説明しました。特に、各登壇者には、事前資料と当事者・家族にとって難しいと予想される用語に関する説明資料の提出を依頼しました。第2に、医療コミュニケーションの専門家であるプログラム委員に講師を依頼し、登壇者を対象に、市民向けのプレゼンテーションの方法についてのレクチャーの機会を設けました。これらの取り組みを通して、各登壇者に当事者・家族と協働する大会であることについて意識統一を図りました。

第17回大会は、広報活動を積極的に行った大会でもありました。大学・研究機関の関係者だけでなく、日本精神科看護協会や地域精神保健福祉機構コンボなどにチラシ配布をお願いしました。また、家族団体（みんなねっと）や職能団体、出版系企業にも、雑誌やメールマガジン、ホームページ、SNSなどで第17回大会について周知してもらいました。加えて、大会事務局は、FacebookとTwitterを開設し、9月から開催当日まで、毎日のように学会や大会あるいは統合失調症に関するニュースを発信しました。実際には、関係者の方々に口伝いで第17回大会についてご周知いただいたことも大きな力となりました。例えば、第17回大会の演題発表について、当初想定していた演題数の2倍となる約50件の登録がありました。これは、関係者のご協力がなければ到達不可能な数字でした。

3. 事前企画

2月4日に開催された事前企画は、当事者のプログラム委員からの発案でした(図2)。事前企画は、日本統合失調症学会を知らない当事者や家族、支援者を主対象として、大会本番に向けた準備運動となるような参加費無料のイベントを開催することで、第17回大会の一層の周知を図ること、そして学術大会に参加することの敷居を下げるのが目的でした。実際、多くの方にご関心をもっていただき、約400名の方から参加登録をいただきました。

企画内容は、「統合失調症研究のマップについて」「当事者や家族が研究や学会に参加すると何が良いの?」「統合失調症の生物学・脳科学研究は何をしているの?」「偏見、差別、スティグマ、リテラシー、何が違うの?」という4つのテーマで構成されました。事前企画は、本大会で開催されたシンポジウムの基礎的な情報提供や議論の機会となっただけでなく、大会事務局も学ぶことの多い機会となりました。例えば、事前企画後のアンケートでは、参加者に難しいと感じた用語について尋ねましたが、その結果、指摘された用語はカタカナや英語のものがほとんどでした。この結果は、本大会における難しい言葉リストの作成に大いに役立ちました。

第17回日本統合失調症学会 大会事前企画

当事者×研究者が語る統合失調症研究
- 誰にも開かれ、対話できる学会を目指して! -

日程：2023年2月4日（土）
時間：15:30-18:00
料金：無料

申込方法：大会ホームページの「事前企画」ボタンか、QRコードから！

※申込はPeatixを利用しています。
※どなたでも参加できます。
※見逃し配信は、本大会の申込者のみです。

こんな言葉を知っていますか？

共同創造？ 当事者参画？ 家族参画？
脳画像？ 生物学的研究？ 基礎研究？
スティグマ？ リテラシー？ 予防？

足元と未来を共に照らすために、
一緒に準備運動をしませんか？

図2 事前企画のフライヤー

4. 参加者数とアンケート結果

第17回大会は、合計550件を超える個人・グループに参加登録をいただきました(表1)。特に、当事者・家族(・学部生)の方が200件となっていました。また、新たな参加形態として設定したグループ参加枠にも9グループの登録がありました。大会後のアンケートにご回答いただいた方は約110名でしたが、5段階評価の満足度で「とても満足した」「まあまあ満足した」の合計が約90%となっていました。また、第17回大会が、多様な立場の方が参加しやすいように試みた各工夫も回答者から支持を得ており、最も支持を得た工夫は見逃し配信でした(図3)。実際、自由記述でも、「後でゆっくり見られる」、「オンライン大会は家から出ることができなくても、ベッドの上から見られる」など、見逃し配信やオンライン大会を肯定的に捉える回答が多くありました。一方で、自由記述には「一般演題をどこまで当事者・家族向けにしたほうが良いのか迷った」という回答や「ディスカッションの時間が短い」、「見逃し配信のあるプログラムとないプログラムがわかりづらかった」などの回答もありました。

表1 第17回日本統合失調症学会 参加登録者・グループ数

属性	参加形態	
本大会		
会員	個人(評議員)	43名
	個人(一般)	45名
	グループ	1グループ
臨時会員	個人	218名
	グループ	5グループ
当事者・家族・学部生	個人	200名
	グループ	2グループ
市民講座のみ		
	個人	32名
	グループ	1グループ

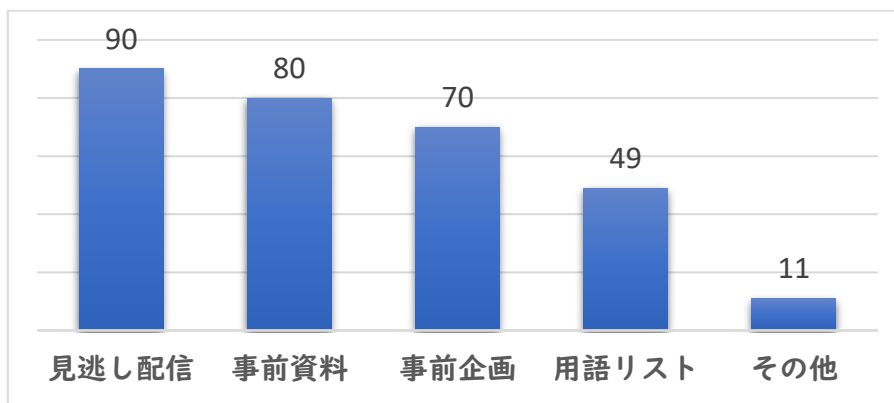


図3 第17回日本統合失調症学会 大会後アンケートの結果から
(よかった工夫, n = 113)

5. 大会の振り返りと今後に向けて

第17回大会を振り返ると、会員以外の方や当事者・家族に数多くご参加いただいたことから、「当事者・家族との協働」の場を設けることについては成功したのではないかと考えております。また、プログラム委員で考えた種々の工夫も参加者から評価していただいたことから、多様な立場の方が参加しやすい大会にできたのではないかと思います。特に、オンライン大会や見逃し動画は、移動や大勢の会場が苦手な方などには大きなメリットとなることが示唆され、今後も継続的に取り組むことで、様々な方にご参加いただける大会が実現できると期待されます。一方で、アンケートにご回答いただいた方は参加登録者の1/5程度であることから、満足度の結果などは留意する必要があります。加えて、ディスカッション時間や学術的関心が交差することが醍醐味となる一般演題における協働の在り方には課題が残り、今後の議論や発展が望まれます。

当事者・家族との協働は、近年になって急速に関心が高まっていますが、そのアイデア自体は新しいものではありません。日本統合失調症学会が協働と対話を具現化する「社会実験」を試みることは、他学会にも好影響を与えると期待され、今後も学会全体としてこの方向性を継続していただけると嬉しく思います。

6. 謝辞

本大会は、数えきれないほど多くの方のご協力のうえて成り立った大会となりました。若手・中堅のコメディカル研究者である私たちのチームに第17回大会を任せていただき、「社会実験」を温かく見守っていただいた学会長の福田正人理事、副学会長の村井俊哉理事、笠井清登事務局長に厚く御礼申し上げます。また、「当事者・家族との協働」「対話」の道を切り開いてくださった第16回大会の事務局メンバーの皆さま、第17回大会を事務的に支えていただいた学会事務局およびカンファの皆さま、そして通常の学術大会にはない事前資料の提出や用語リストの作成に快くご対応いただいた登壇者の皆さま、演題発表を盛り上げていただいた発表者および座長の皆さまに心からの感謝を申し上げます。最後に、第17回大会を共に築き上げていただいたプログラム委員の皆さま（井汲悦子さん、大石智さん、奥原剛さん、金原明子さん、川北誠さん、小瀬古伸幸さん、佐竹直子さん、富沢明美さん、中越由美子さん、藤井千代さん、堀合研二郎さん、森元隆文さん、柳下祥さん、安間尚徳さん、山田悠平さん）に拝謝申し上げます。